

STATION Ai 株式会社

愛知・東海エリア発 挑戦者たちが集う オープンイノベーション拠点の現在地

名古屋市・鶴舞公園の南側に、ひときわ存在感を放つ建物がある。

地上7階建て、延面積2万3,600平方メートル。愛知県が中心となり、2024年秋に開業した「STATION Ai(ステーション・エーアイ)」だ。

スタートアップ、事業会社、金融機関、大学、市町村などおよそ1,000社が入居するこの施設は、国内最大規模を誇るオープンイノベーション拠点である。

「アジアにおけるオープンイノベーションの聖地を目指す」——地域の大きな覚悟と期待を背負ってスタートしたSTATION Aiは、2025年10月に1周年を迎えた。

DATA

社 名: STATION Ai 株式会社

所在地: 愛知県名古屋市昭和区

鶴舞1丁目2番32号

電 話: 050-1752-4535

従業員: 約100名

HP: <https://stationai.co.jp>

不毛の地と呼ばれて

愛知県が「Aichi-Startup戦略」を打ち出したのは2018年。地域の産業構造がEVの台頭などで変革を迫られる中、県は起業家・スタートアップ育成とオープンイノベーション支援を軸に、新しい技術とビジネスモデルを生み出そうとしている。

戦略の中核を担うのが「STATION Aiプロジェクト」である。フランス・パリにある世界最大級のスタートアップ集積施設「STATION F」をモデルに、国内でも類を見ないスタートアップ支援・オープンイノベーション支援の拠点を作る構想だ。

「スタートアップ不毛の地」

愛知を含む当地域は、長くそう呼ばれてきた。製造業を中心とした大企業が集積し、「地元の大企業に就職し、そこで働き続けること」が成功の象徴とされた。しかし、安定志向の強すぎる風土は起業への挑戦を阻み、スタートアップの成長を妨げてきた。

「起業は大企業に入れなかった人の選択肢」

「スタートアップは小さな事業をやっている人たち」

当地域ではそう誤解する人が、今も少なくない。

また、当地域は製造業中心の自前主義「クローズドイノベーション」の文化が根強く、社外の技術やアイデアを活用する「オープンイノベーション」があまり浸透していない現状があった。

STATION Aiプロジェクトの始動 ～地域に眠る可能性

STATION Aiを率いるのは、ソフトバンクグループで10年以上にわたり、新規事業の立ち上げや起業家育成などを手がけてきた佐橋宏隆社長だ。「次の革命といえるほどの成長産業を生み出すのはスタートアップだ。そこにいかに投資し、育てるかが地域の未来を決める」

スタートアップの最前線を見てきた佐橋社長は、国内のこうした盛り上がりが当地域であまり知られておらず、悔しい思いを抱いていた。

また、自身も三重県桑名市の出身で、当地域の保守的な雰囲気を身をもって感じてきた。

一方で佐橋社長は、当地域を「國內で一番ポテンシャルがある」と評価する。

ものづくりの確固たる産業基盤、優れた研究の種を持つ大学、そこに集う優秀な人材——こうしたスタートアップを育む条件がすでにそろっているためだ。

大企業の本社が集積し、オーナー企業が多いことも強みだ。一度意思決定が下されれば、新規事業やオープンイノベーションへの舵切りは速い。「地域の高度なものづくり産業と結びつく、他にはないスタートアップ・エコシステムができるはずだ」

佐橋社長はそう確信する。「うまくいかなかったら、この地域は終わりなんじゃないか」——当初、巷ではプロジェクトの成功を信じ切れない声もあった。

しかし、その不安の裏には同じだけの期待があった。STATION Aiのオープンに向けた入居者募集には、スタートアップや既存企業を含め申込が殺到。特定の領域におけるイノベーションを起こそうとしているスタートアップ約500社、スタートアップとの協業によるオープンイノベーションに活路を見いだすパートナー企業約200社が集まった。

2024年10月31日、多くの人々の希

望を託され、STATION Aiはグランドオープンした。

施設と人が生み出す出会い

STATION Aiには企業同士の「偶然の出会い」を促す様々な工夫が施されている。

地上7階建ての各フロアをスロープでつなぎ、誰もが自然とすれ違うように動線が設計されている。イベントスペースやカフェ・レストラン、ホテルなどは一般の人も利用可能だ。会員専用のコワーキングスペースや固定席では極力壁を取り払い、他の起業家や企業と交流しやすい空間になっている。

また、ビジネスや事業アイデア構築を学ぶ勉強会やワークショップ、気軽に参加できるカフェ会など、毎月約100回にも及ぶペースでイベントが開催されている。イベントをきっかけに個別商談に進むケースも少なくない。

同じ関心や課題を持つ入居者同士が自ら立ち上げるコミュニティ「STATION Aiギルド」も活発だ。生成AIギルドや若手起業家ギルド、街づくり・不動産活用ギルドなど、現在9つのギルドに約100名が参加。ギルドの活動を通じて知り合った企業が協業に至る事例も生まれている。

企業同士が、同じ挑戦者として励まし合える場所にもなっている。

「同じスタートアップだからこそ共有できる課題や悩みも多く、情報交換もできるので心強い」

ある入居者はそう語る。また、初めて会う企業とは、「STATION Aiにいらっしゃるんですね」という一言で会話が自然に始まる。STATION Aiに属していることが、信頼を構築するうえで大きな武器になる。

STATION Aiの巧みな仕掛けが、ここでしか生まれない化学反応を起こしている。

STATION Aiのコア機能 ～課題解決の伴走者たち

STATION Aiに集うスタートアップは、「市場を開拓したい」「大企業と接点を持ちたい」「資金調達を成功させたい」「優秀な人材を採用したい」といった多様なニーズを抱えている。

一方、事業会社を中心とするパートナー企業は、「オープンイノベーションを始めたい」「スタートアップと出会いたい」「イベントを開きたいが方法が分からず」と悩む。

こうした課題に応えるのが、STATION Aiの専門スタッフ——



STATION Ai 株式会社
代表取締役社長 兼 CEO 佐橋 宏隆氏

コミュニティマネージャーやOI(オープンイノベーション)コーディネーターだ。

支援領域は、人材・採用支援、営業・顧客開拓支援、資金調達支援、専門家や行政の支援仲介、グローバル展開支援、成長支援、イベント運営支援など、非常に多岐にわたる。

スタートアップとパートナー企業の双方に伴走し、課題を深く理解したうえで、解決に向けた仮説を立て、最適なテクノロジーやプロダクトを結びつけていく。

「私たちは単なるスタートアップ支援施設ではなく、地域の経済や産業の再構築を担う『エコシステムビルダー』として日々取り組んでいます」

佐橋社長の言葉には使命感が感じむ。受動的なメンバーは存在しない。それぞれが自分の役割を見つけ、熱意をもって挑戦者を支えている。

起業を当たり前の選択肢に ～学生たちの本気の起業体験 「STAPS」

STATION Aiが掲げる目標の1つが、学生にとって起業を当たり前の選択肢にすることだ。

「起業するしないに関わらず、ゼロか



STATION Ai

ら事業を作る力は間違いなく必要で、高く評価される。むしろその力がないことがリスクになる時代が来ている」

佐橋社長はそう鋭く指摘する。

そこで愛知県が主催し、STATION Aiが運営しているのが、学生向けの起業家支援育成プログラム「STAPS（STATION Ai Program for Students）」だ。

学生が参加しやすい夏期と春期に開催され、事業アイデアの創出、そのアイデアが市場ニーズに合っているかを確かめる仮説検証、先輩起業家などメンター（助言者）によるメンタリング（助言・指導）、事業アイデアを限られた時間内でプレゼンテーションするピッチコンテスト等を通じて、起業を約1.5ヶ月で集中的に体験する。

「本気で起業に挑戦したい」「自分のアイデアが通用するか確かめたい」——そんな覚悟を持つ学生たちが集まり、アイデアの言語化の難しさ、仮説検証の厳しさ、チームで進める難しさに直面しながらも、乗り越えようともがく。コミュニティマネージャーはその挑戦に全力で寄り添う。

しめくくりとなる最終ピッチ大会では、第一線で活躍する起業家や投資家の鋭い視線が注がれる中、学生

たちは1ヵ月半で磨き上げた事業アイデアで、渾身のプレゼンに挑む。

これまでのプログラム参加者^(注)は706名。うち25名は起業まで至った。参加者の満足度は非常に高く、プログラム終了後もスタッフやメンターとして関わり続ける学生もいる。

企業の共創を加速する ～オープンイノベーション支援 「SKIP」

STATION Aiには事業会社などのパートナー企業も入居している。多くは「新規事業を生み出したい」「スタートアップと協業したい」と考えているが、具体的な進め方に悩む企業は少なくない。

そんな声に応えるべく設計されたのが「SKIP(STATION Ai Kinetic Innovation Program)」だ。OIコーディネーターが企業に伴走し、事業課題や新規事業テーマの整理から、スタートアップとのマッチング、協業後の実証実験や事業化支援まで、徹底的にサポートする。

当地域のある企業は、新しい事業と収益の柱を築くため、オープンイノベーションに挑むべくSTATION Aiに入居した。しかし、これまでオープンイノベーションの経験はなく、何から

始めればよいのか分からぬ状況だった。

そこで、STATION Aiの「SKIP」に参加。ワークショップやOIコーディネーターとの壁打ち（アイデアや課題を相手に話すことで考えを整理すること）を通じて、自社のアセットを再確認し、目指す新規事業の方向性を明確にすることができた。

続いて、課題やニーズを企業自らがプレゼンし、スタートアップから解決策を募る「リバースピッチイベント」を開催。STATION Aiの綿密なリサーチとネットワークにより、精度の高い提案が集まり、その中から相性の良いスタートアップとマッチングすることができた。

企業はそれぞれ異なる背景や目的からオープンイノベーションに取り組んでおり、STATION Aiではこうした企業の具体的な課題を、支援活動を通じて把握し、知見として蓄えてきた。佐橋社長は、これらの蓄積を「我々にとっての大きな資産」と語る。

集まった課題からは、多くの企業に共通する課題やトレンドが見えてくる。これにより、全体のニーズを把握し、新規事業の創出や政策提言のヒントを得ることが可能になるほか、スタートアップの技術やサービスとの的確なマッチングにもつながる。

STATION Aiは、これまでの支援実績と蓄積された課題データを活用することで、企業とスタートアップの協業をさらに促進し、より多くのイノベーションを生み出していきたいと考えている。

1周年を迎えて ～確かな手ごたえと見えてきた課題

STATION Aiは2025年で1周年



STATION Aiの各階をつなぐスロープ。上下の様子が見える設計にし、自然な声かけが生まれるよう工夫した。

を迎えた。

「開業当初は大きなプレッシャーを感じていたが、今はSTATION Aiを皆さんと“一緒に作っている”感覚が強い。ともに地域を良くしていこうという思いの方々ばかりだ」

佐橋社長はそう語る。

会員数の伸びも好調で、スタートアップ・パートナー企業ともに着実に増加している。オープンイノベーションの実績も蓄積され、支援ノウハウも整ってきた。

学生起業も連鎖的に広がり、大学発スタートアップも増加傾向にある。企業にとってもスタートアップとの協業が選択肢として浸透しつつあるなど、一定の手ごたえを感じている。

しかしながら課題も多い。例えば、当地域では女性起業家が少なく、起業しようという機運自体が弱い。

海外スタートアップの誘致も課題だ。現在は50社以上の海外スタートアップが参画しているとはいえ、まだ数は多くない。そもそも海外から見た日本市場の優先度は高くなく、誘致の難易度は高い。

社会人の起業支援も注力分野だ。確固たる技術や知見をもつ研究者やビジネスマンが当たり前に起業できる環

境が整ってきており、そもそも当地域は転職が少ないなど、人材流動性の低さが社会人起業を難しくしている。「全体としては良い状態にあり、手ごたえも感じている。一方で課題が多く、まだまだ時間がかかりそう。今はSTATION Aiの強みを作っている段階だ」

佐橋社長は冷静に現状を見つめる。この1年は成果と同時に、次の飛躍に向けた準備期間でもあった。

開業5年後に向け ～アジアにおける オープンイノベーションの 聖地を目指す

STATION Aiは、2029年までにスタートアップの会員数を1,000社に伸ばすことを目標に掲げている。「オープンイノベーションの成果が少しずつ出始めており、そうした実績の積み重ねが、新たな挑戦や連携を生んでいくと信じている。アジアにおけるオープンイノベーションの聖地として、『スタートアップと協業するならSTATION Aiへ』という状況を作っていくたい」

佐橋社長は力強く語る。

今後は、引き続き成功事例を積み重ね、地域内外への認知度を高める

とともに、海外の支援拠点やベンチャーキャピタルとの提携を強化する方針だ。また、生成AIとハードウェアの融合、特にロボティクスを主とした次世代の成長分野において、愛知・東海エリアがサプライチェーンの中心を担えるよう基盤を整えたいとも考えている。

さらに、スタートアップだけでなく中小企業も含めた幅広い協業の可能性を模索していく。

「この地域には日本が誇る技術を持つ中小企業が多く、協業の事例を作りやすいだろう」

佐橋社長は期待を込める。

そして今、佐橋社長が伝えたいのは、起業や事業成長、協業を目指すうえでの大胆さと能動性だ。佐橋社長はこう呼びかける。

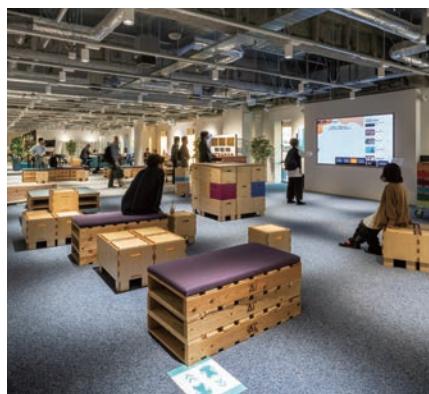
「わがままに、支援を引き出すくらいの感覚で、STATION Aiを使ってほしい」

伸びる可能性のある事業やスタートアップを思いっきり応援する—それがSTATION Aiのスタンスだ。社内外を積極的に巻き込んで、大胆に成長を狙ってほしい。そのための支援を、STATION Aiは惜しまないつもりだ。

1周年ははじまりにすぎない。地域が持つ強みを活かしつつ、新しい時代の波を取り込み、世界に開かれたイノベーションの聖地へと成長していく。その未来像に向けて、STATION Aiは地域とともに走り続ける。

(注) 過去7回の開催における実績(2025年10月31日時点)。STATION Aiの前身であるPRE-STATION Aiでの実績も含む。

(2025.11.7)
OKB総研 調査部 梅木 風香



STATION Aiのコワーキングスペース。開放的な空間で企業の垣根を超えた交流を促す。



STATION Aiで開催されたイベントの様子。